

まだまだ

東北 復興日記



▶▶▶ 200

ボランティアに参加すると被災地への関心が高まり、家族や周囲に話すことも増え、復興活動に継続して加わるようになる。昨年冬、首都圏から福島県いわき市や広野町にボランティア参加した方々へのアンケート(回答二百二人)で、こんな傾向が明らかになりました。

J K S Kは二〇一三―一五



J K S K会員・
宮城大学事業構想学
研究科博士後期課程

大和田順子さん



幸せな社会「信頼」が鍵

年、広野町にボランティアバスを運行して車座交流会を開催。草取りや綿摘みに取り組んだほか、町長や町民の自宅に泊まってさまざまな話をうかがったり、アヒルが除草する水田に写真など昔ながらの美しい田園地域を見せていただいたりしました。

原発の廃炉に最前線で取り組む多くの作業員とも共生する街。そんな中で「新しい高校ができた」「祭りを復活する」という話に接するたびにうれしさがこみ上げます。

こうした交流を機に昨年春「広野わいわいプロジェクト」がスタート。いわきや首都圏のNPOが広野町民と協力して綿栽培、防災緑地の植樹、にぎわいづくりのイベント、女性の手仕事づくり、を行っています。今年四月にはNPO法人「広野わいわいプロジェクト」(根本賢仁代表)も設立。来月十七、十八の両日には、ボランティアバス「オーガニックコットン収穫祭とプレゼンツツリー交流会」が開かれます。この機会に広野町に行ってみませんか。

今「ソーシャル・キャピタル」が注目されています。社会や地域で人々の信頼関係や

結びつきを表す概念のこと。

これが蓄積された社会では治安、経済、福祉、教育、健康、幸福感などに良い影響があるといえます。被災地と首都圏の交流に取り組んでいるのも、信頼関係を紡ぎ、温かくて幸せな地域を共創しようという思いがあるからです。

各地で相次ぐ災害から復興していく過程でも「交流」は大きな力になることでしょう。

広野わいわいプロジェクトの問い合わせは、根本代表☎090(7328)2302。

※この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。